

秋田県生涯学習・社会教育研究大会【記念大会】

実施日：令和2年11月13日（金） 13：30～15：40 会場：県生涯学習センター

本年は秋田県生涯学習推進50周年・秋田県生涯学習奨励員協議会結成45周年・秋田県生涯学習センター開所40周年となります。これを記念し、「秋田県生涯学習・社会教育研究大会【記念大会】」が開催されました。当日は新型コロナウイルス感染症対策のため、県内25市町村に設置された29会場に、記念式典・記念鼎談の様子をライブ配信しました。

【記念式典】

記念式典では、秋田県生涯学習推進本部長の佐竹敬久秋田県知事（写真左）、秋田県教育委員会の安田浩幸教育長（写真中）、秋田県生涯学習奨励員協議会の森田千枝子会長（写真右）から挨拶をいただきました。その後、秋田県民歌の演奏を聴きました。



【記念鼎談】『持続可能な地域づくりに向けて』

原義彦秋田大学教授、新妻二男岩手大学名誉教授、佐藤智子東北大学准教授の3人を講師に招いて、記念鼎談が行われました。

鼎談の前半では、『これまでの生涯学習・社会教育についての総括的な話題提供』が中心となりました。原先生からは、秋田県が生涯学習・社会教育に取り組んだのは、教育に力を入れて『人づくり』しなければならないという意識があったことや、大人自身の学習への取組や、地域の住民とのつながりの強さが、子どもの学力等に影響を与えた要因と考えられることなど、興味深い話がありました。

また、新妻先生からは、東日本大震災後の岩手県において、公民館が被災者保護・復興を支えたことや、「釜石の奇跡」と言われる児童生徒・高齢者の避難も、震災以前から学校・保育園・高齢者の福祉施設等の交流が盛んに行われていたからこそ実行できたことを伺いました。

後半では、『生涯学習・社会教育が今後の地域づくりにどう関わっていくか』について、様々な意見が出されました。原先生からは、「公民」という言葉の意味についての解説もあり、「公民館」と高校の教科の「公民」とは根っこが同じであることを知りました。「自分と社会の関係をきっちり理解するとともに、自分の利益だけを考えず、相互に助け合いの心をもつ人＝公民」になるため、学校で行われる教育が「公民」の授業であり、大人に対して「公民」の意識を涵養するため提供される学びの場が「公民館」なのだという話は、とても納得できました。また、一般的に使われる「PR」は本来、「public relations＝『公共の関係』」であって、社会教育に携わる人間は積極的に「PR」を行う・広げる機会を作っていく必要があることを学びました。

新妻先生からは、今後求められる「小規模」「分散」「ローカル」な取組を実現するため、社会教育関係者が「ネットワークをつくる力」「コーディネート能力」を最大限に発揮する必要があることを伺いました。

佐藤先生からは、若者が地域の行事に参加しない問題についての言及もありました。若い世代に、「地域のために何かしたい」という思いがないのではなく、「今までこうやってきた」という運営方法の前に、自分の裁量の余地がないと感じさせてしまうのが問題なのだという指摘です。これについては、目的を共有した上で、各自が得意なことに取り組み、目的達成を目指すバランス感覚が重要だとの話がありました。



原義彦 秋田大学教授



新妻二男 岩手大学名誉教授



佐藤智子 東北大学准教授